

ま ぶち こう じ
馬 淵 浩 二

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文.博第64号

学位授与年月日 平成10年10月8日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)
実践哲学専攻

学位論文題目 イデオロギー論の問題構制——イデオロギーの問題地盤の意義と
限界——

論文審査委員 (主査)
教授 篠 憲 二 教授 華 園 聰 磨
教授 野 家 啓 一
助教授 熊 野 純 彦

論文内容の要旨

はじめに

イデオロギー概念を批判的・否定的な意味で用いるイデオロギー論には、一種の逆説が存在している。その典型的な構図に従えば、イデオロギーは「虚偽意識」であり、イデオロギーのこの偽りを通じて不正な社会的現実が隠蔽され、再生産されると想定される。そして、そのようなイデオロギー論の構想を支える根本動機は、このような迷妄の状況から人間を解き放つことだった。それ故、イデオロギー論はイデオロギー批判を自らの存在理由の一つとする。他方で、イデオロギーの上述の機能が理論化される過程で、イデオロギーに過剰な力能が与えられ、イデオロギーの支配の肥大化とでも言うべき状況が成立する。こうして、批判の対象として相対化すべきイデオロギーに精密な規定を与えようとすればするほど、逆にイデオロギーの支配の威力を過大に評価するというイデオロギー論の逆説が生じた。提出論文の全体に通底しているのは、このイデオロギーの過剰評価の相対化という試みである。

上述のイデオロギー論には暗黙の前提が存在すると思われるが、この前提を「イデオロギーの問題地盤」と呼ぶ。その多義性にもかかわらず、イデオロギー概念の使用と了解が可能であるのは、この前提が共有されているからだ、と、提出論文は想定する。その最大公約数的な定式は以下のようなになる。「人間の支配と服従を媒介する社会現象が存在する。この現象は社会的現実（多くの場合不正な）を隠蔽する、あるいは歪曲するという意味で虚偽である。この現象をイデオロギーと呼ぶ」。

これがイデオロギー論の前提の一つを形作り、同時にイデオロギーの過剰評価を産み出す要因にもなる。提出論文は、この前提を括弧に入れ、それを自明視するイデオロギー論が、自らの帰結のうちに如何なる問題や葛藤を生み出すのかを明らかにする。また、それと同時に、イデオロギーの過剰評価と相即する形で相対的に軽視されてきた契機にも注目する。それは「イデオロギーを前にした人間」という契機である。主たる素材として取り上げられるマルクスとアルチュセールのイデオロギー論においては、イデオロギーが作動する条件としてのイデオロギーの受け手への眼差しが欠如しているのである。この眼差しを個々のイデオロギー論の批判的な読み直しに用い、従来のイデオロギー論において欠如しているこの契機を鮮明にすることも、課題の一つとなる。なお、以上は第1章（序論）の要約に相当する。

1 マルクスのイデオロギー論の個性

マルクスのイデオロギー論に関して注目すべきことは、イデオロギー概念の定式化の過程において、イデオロギーの存在基盤が主観的な水準から社会的現実性の水準へと変化していることである。他方、マルクスにとってイデオロギーの存在は、イデオロギーを必要とする社会の欠陥を意味するものであった。イデオロギーは社会のメカニズムに根差す地位が与えられるが、そうであるが故に、マルクスにとってイデオロギーの存在や支配は克服され廃棄されるべき対象である。前半部分では、このようなマルクスのイデオロギー論の個性を考察した。

第2章 初期マルクスの宗教批判

第2章の課題は、初期マルクスの宗教批判の考察を通じて、宗教批判がイデオロギー論の発生のための予備的な枠組みを提供していることを明らかにすることである。初期マルクスの宗教批判はフォイエルバッハの宗教論の影響を受けているが、後者が前者、そしてイデオロギー論に対して与える積極的な要素として以下の二点を確認した。(1)宗教は人間が自分自身の本質に関してもつ幻想であることが示された（＝虚偽意識）。幻想であるのは、人間の本質の諸性質が神という宗教的对象に誤って帰属されるからである。(2)本来は人間の想像力の産物であるにすぎない幻想を仰ぎ見、それに支配される限りで、それは自己疎外である。

マルクスは以上の2点をフォイエルバッハから受け継ぐが、マルクスの視線は、それを越えて、宗教がもっている社会的機能へと注がれる。それ故、宗教の成立の根拠として人間の本質

が実現されないことが挙げられていても、その理由は、フォイエルバッハ流の類と個の不一致という非歴史的なものではなく、社会的現実が人間の本質の実現を妨げるという歴史的なものである。それゆえ、マルクスは、「法哲学批判序説」において、宗教を世俗的な基礎から論じようとする姿勢を打ち出すのである。その結果、マルクスは、虚偽意識と疎外というフォイエルバッハ流の宗教の規定に加えて、宗教に対して、現実世界の正当化、補完、維持の機能を授けている。イデオロギーという概念は登場していないが、このような機能は後にイデオロギーと呼ばれる現象の機能と重なりあう。以上のような展開によって、フォイエルバッハの宗教論に依拠しながらも、マルクスは独自の宗教論を提示したのであり、そのことによって、初期マルクスの宗教批判は後のイデオロギー論の生成の契機となりえていることを明らかにした。

第3章 『ドイツ・イデオロギー』のイデオロギー論

第3章の課題は、『ドイツ・イデオロギー』におけるイデオロギーの「暗箱モデル」(カメラ・オブスキュラというイデオロギーの比喩)を検討し、その有効性と限界を確定することである。そのモデルは、暗箱においては転倒した像が映しだされるように、イデオロギーにおいては人間の諸関係が転倒していると述べる(第一の比喩の系列)。暗箱モデルの固有性は、イデオロギーの条件を確定し、それを転倒(=虚偽)に求めることである。さらに、暗箱モデルは、転倒が物質的な根拠を持つことを示すことで、イデオロギーが社会に構造的に組み込まれた虚偽であることを示唆する。他方で、暗箱(=暗室)のもう一つのイメージの成立のために、幻想的契機(反映、反響、昇華物という比喩)が導入されるが、それらは観念的領域の自立(物質的な起源の忘却)をイデオロギーの条件として提示する(第二の比喩の系列)。この系列は転倒の比喩の系列とは異質であって、暗箱モデルのイメージを変容するのであり、イデオロギーに弱々しい存在しか与えることができない。

第3章の論点の一つは、転倒と自立という二つの条件は両立しないのではないかという懐疑的な解釈を提示することである。前者は、イデオロギーに極めて堅固な存立基盤を与えるものであるが、後者は弱々しい影のような存在としてのイデオロギーというイメージを産み出す。もう一つの論点は、イデオロギーのモデルとして暗箱を用いることの是非である。(1)暗箱は、かつては正しい認識のモデルであったのであって、暗箱を虚偽意識のモデルとして用いる必然性はない。(2)マルクスはその必然性を「転倒=虚偽」の図式に求めたのかもしれないが、視覚の成立にとって転倒は本質的であって、真偽に関しては中立的である。だから、暗箱に完全に依拠する限りは、転倒を真/偽、それ故イデオロギー/非イデオロギーの基準とする根拠は脆弱である。(3)暗箱モデルに忠実な限り認識を反映とみなす傾向が生じるが、『ドイツ・イデオロギー』の認識論はこれとは別であり、虚偽の認識に関してであれ、暗箱を認識のモデルとして用いることは、『ドイツ・イデオロギー』の前提に反する。暗箱モデルがイデオロギー的加

工の過程の指標となりえているのは確かであるとしても、それは指標でしかありえなかったのである。

第4章 『資本論』のイデオロギー論

第4章の課題は、『資本論』におけるフェティシズム論が、イデオロギー論に対して有する意味と限界を確定することである。第4章はフェティシズムをモデルとしたイデオロギー観をフェティシズム的イデオロギー観と名づける。フェティシズム的イデオロギー観の意義に関しては、以下のような結論を導きだした。フェティシズム的イデオロギー観は、フェティシズムをモデルとすることで、イデオロギーの根拠と生産者を社会構造の方に求めている。そのことによって、イデオロギーの条件としての階級帰属性が相対化され、イデオロギーの条件の問題としてのイデオロギーの生産者に関する新たな洞察が生み出される。

ただし、幾つかの疑問点も提示した。まず、フェティシズムが社会関係から生じ、イデオロギー的な振る舞いをするのが事実であるとしても、そこから、フェティシズム的思考が社会全体に特徴的であると結論するなら、そこに飛躍の存在を感じざるをえない。また、フェティシズム的イデオロギー観は、イデオロギーをフェティシズムのメカニズムによって特徴づけるが、その時イデオロギー的なものはすべてフェティシズム的であることを承認するのかという疑問が生じる。つまり、フェティシズムはイデオロギーの諸性格のなかの一つではなく、イデオロギー的なものがすべてフェティシズム的な性格を自らの必要条件とするのかという疑問である。このような疑問に加えて、フェティシズム的イデオロギー論は、もう一つの重要な疑問を喚起する。イデオロギーの生産者が階級から社会へと移動されることは新しい知見であるが、それは、イデオロギーにいつそうの客観性を授けることによって、イデオロギーを前にした人間の受動性を強化することにつながるのではないか。

第4章は、以上から、フェティシズム的イデオロギー観は、イデオロギーに客観的な存在を授けるマルクスのイデオロギー論の一定の帰結であるが、しかし、それをイデオロギー論全体に妥当させることは困難ではないかという見解を提示した。

第5章 マルクスとイデオロギーの終焉

マルクスにはイデオロギーが存在することに関する、つまりイデオロギーの事実性に関する直観的な評価が存在する。それも、マルクスのイデオロギー観を特徴的なものにする。第5章は、この側面からマルクスのイデオロギー観を素描する。

マルクスにとっては、イデオロギーは廃棄されるべき現象である。端的に言って、それは「疎外」現象だからである。それ故、イデオロギー論の構想は、イデオロギーを生産する現実の批判を内包するのであり、「イデオロギーの廃棄された現実」という根本的な理念によって動機づけられている。イデオロギーが存在する現実とは、イデオロギーの存在しない透明性の理

念によって測定され、それによって否定されるべき対象とされている。以上を、初期マルクスの批判概念等の考察を通じて明らかにした。

この展開を踏まえ、マルクスは、イデオロギーを現象を二重に否定的に捉えていることを確認した。まず、イデオロギーは「虚偽」の何かであり、社会的現実を隠蔽するように機能する。イデオロギーとは何であり、如何なる機能を有するのかという視点からみて、マルクスにとってイデオロギーは否定的であった。換言すれば、イデオロギーは認識論的価値、機能的側面から見て否定的に評価されている。同時に、イデオロギーはそれに止どまらぬ否定性を有している。イデオロギーが存在するという事実性に関しても、マルクスにとってイデオロギーは否定的だった。イデオロギーは認識論的に虚偽であると同時に、存在論的に非真理でもある。イデオロギーは、人間が社会を統制できないことによって生産される産物であるからである。その意味で、イデオロギーは「人間学的」にも否定的なのである。以上から、逆説的だが、マルクスは「イデオロギーの終焉」を語っている（望んでいる）というテーゼを導くことが出来るのであり、このテーゼによってマルクスのイデオロギー観の個性を示すことが出来るのである。

2 イデオロギー論の二つのモデル（第6章）

第6章では、建築モデルと階級モデルという二つのモデルを取り上げ、それらが生み出すイデオロギー観の対照を行う。『経済学批判』において提示される建築モデルにおいては、社会が建築物との類比によって説明され、経済が土台の位置に、イデオロギーを含むその他の領域が上部構造の位置に置かれる。建築モデルでは土台と上部構造の関係性が強調されている。土台が上部構造を決定するという関係である。その帰結は以下の二点である。(1)建築モデルは、社会の出来事を土台によって一方的に決定されるものと見做す経済主義を許す余地を残すのであり、イデオロギーの身分を単なる随伴現象へと引き下げる可能性がある。(2)建築モデルにおいては、イデオロギーの条件として社会的存在による意識の決定という原則が提示されている。この限りで、イデオロギーの条件の問題は、特定の階級という視点ではなく、物質的生活を営むすべての人間との関係において定式化される。

他方、『ドイツ・イデオロギー』の階級モデルにおいては、支配階級の思想が支配的な思想であり、この思想の生産者が支配階級であること、被支配階級は自らの思想を生産できないので、支配的思想を受動的に信じる事が表明されている。ここから、階級モデルはイデオロギーの条件を階級帰属性に求めていると言える。だがこのモデルは、階級帰属性を認めると同時にイデオロギーの支配に巨大な力を与えることで、以下の葛藤を生む。(1)階級モデルが主張する階級帰属性の立場に立つ時、なぜ一方の階級が他の階級のイデオロギーを受け入れるのか、その理由が曖昧になる。だが、階級モデルにおいては、支配的イデオロギーの圧倒的な威力にこの受け入れの強制の役割が委託されることで、その理由は事実上問われない。(2)このようにイ

デオロギーの支配が全面化しているとする、今度は階級帰属性の立場に立つにもかかわらず、対抗デオロギーの成立のための余地が残らない。

両モデルの関係について、以下のような解釈を提示した。階級モデルは建築モデルの欠陥を補完しうる。建築モデルの経済主義的欠陥は、デオロギーの支配力の承認（デオロギーの復権）によって補われうるが、これを階級モデルに託すことができるのである。ただし、このような並立に関して疑問点も提示した。建築モデルにおいては、デオロギーの条件は、それを生産し統括する特定の階級ではなく、土台と上部構造の関係のなかで生活するすべての人間との関係において考察されている。他方、階級モデルは、デオロギーの階級との直接的な関係をデオロギーの条件として明示化する立場である。両者は両立しうるだろうか。また、経済主義においては、デオロギーが一方的に決定されるものとして特徴づけられることによって、その過小評価が生み出されたとすれば、階級モデルにおいては、今度は支配的デオロギーが一方的に支配するものとして特徴づけられることによって、その過大評価が生み出されることになる。どちらの場合も、振り子は大きく振れすぎている。以上が、第6章が二つのモデルに対して提示した疑問点である。

3 アルチュセールのデオロギー論

アルチュセールのデオロギー論には、デオロギー支配の肥大化という問題が存在する。支配的デオロギーの身分という視点からこの問題を批判的に考察したのが、第7章と第8章である。

第7章 デオロギーの支配と支配的デオロギー

第7章は、アルチュセールのデオロギー論の葛藤を鮮明にすることを目的とする。この葛藤は、デオロギーの永遠性を主張するために持ち出しているアルチュセールの固有の規定と、伝統的な支配的デオロギー概念との間で生じる葛藤である。

まず、「理論・理論的実践・理論的形成」の分析から、デオロギーに関する存在論的规定と歴史的规定が提示されていることが分かる。存在論的规定は、階級社会にも階級無き社会にも妥当し、その意味でデオロギーは歴史貫通的である。そして、デオロギーの機能は社会的凝集として説明される。歴史的规定は階級社会に妥当する。この場面では、デオロギーの機能は文字通り社会的凝集には求められないが、支配階級に有利になるものとして規定される。

他方で、支配的デオロギーの概念と問題構制が導入され、デオロギーの階級帰属性が承認され、被支配者のデオロギーが許容されている。しかし、このことは、まずデオロギーの存在論的主張に反する。というのは、被支配者のデオロギーは当該の社会の解体を主張する可能性があり、このようなデオロギーは、凝集をデオロギーの機能と看做す存在論的规定から逸脱するからである。また、これは歴史的规定にも反する。被支配者のデオロギーは、

必ずしも支配階級に有利に働くとは言えないからである。

これが葛藤である。裏返せば、イデオロギーの存在論的規定と歴史的規定は、最初からそうした対抗イデオロギーを射程におさめていない規定であるとも言える。アルチュセールがイデオロギー自体の規定と看做すものは、支配的イデオロギーにのみ妥当するようなものであった可能性がある。ここから第7章は、「アルチュセールは支配的イデオロギーをモデルとしてイデオロギーを定義しており、そのため対抗イデオロギーの存在が理論的に保証されず、結果的に支配的イデオロギーの肥大化と過剰評価だけが残される」と結論づけた。

第8章 イデオロギーと想像的なもの

第8章は、想像的なものとしてのイデオロギーという規定（想像性テーゼ）の功績を鮮明にし、支配的イデオロギー論への懐疑という視点からその限界を評価する。まず、第8章が積極的なものとして評価したのは以下の2点である。(1)想像性テーゼは、想像的なものという言葉の語感に反して、イデオロギーの「客観性」を開示する。ここで客観性とは、想像的なものが個人の単なる空想や思い付きの水準をこえた超一個人的な構造を有し、個人のイメージに「無意識」的に、構成的に働きかけるという意味である。(2)想像性テーゼは、再びその語感に反して、イデオロギー＝虚偽という図式を相対化する。つまり、想像的なものがイデオロギーであるのは、それが偽であるという理由からではない。想像的なものは、個人と社会の関係を正当化し自然化するような政治的な機能を持つが故に、イデオロギー的である。

想像性テーゼに対する批判として、イデオロギーの作動の視点が欠けているという解釈を提示した。個人の主観的なものの社会的な被媒介性は鮮やかに描き出されているが、イデオロギーの作動が個人の主観的なものによって媒介されていることは必ずしも考慮されていないのである。イデオロギーが個人の主観的なものを支配するということは、個人の主観的なものがイデオロギーによって媒介されるというだけではなく、イデオロギーの方がそうした個人の主観的なものを取り込むことをも意味する。これがイデオロギーの作動の視点である。こうした批判を、アルチュセールの支配的イデオロギー論の欠陥に対する批判としても提示した。支配的イデオロギーといえども、対抗する集団の利害や願望を編成することによってしか自らの支配を作動させえないのである。第7章で見たように、アルチュセールにおいてはイデオロギーの支配の肥大化が必然化されるのであるが、しかし支配的イデオロギーの支配は自明な前提ではないのである。

4 イデオロギーと虚偽（第9章）

第9章は、イデオロギーの虚偽説（虚偽をイデオロギーの必要条件とする）を巡って検討が行われる。第9章の課題は、イデオロギーの虚偽説を相対化し、イデオロギーと虚偽の関係の相対性を浮き彫りにすることである。

まず、イデオロギーと虚偽の領域は完全には重ならないことを示し、領域の視点から虚偽説を相対化した。もし両者が完全に重なるなら、(1)「すべての虚偽がイデオロギー的である」という仮説が可能になるになるが、(1)は、イデオロギー的ではない虚偽の存在を示すことによって論駁される。つまり、必ずしもすべての虚偽がイデオロギー的ではないことを示せばよい。しかし、この手続きは、虚偽の全領域の中から非イデオロギー的な虚偽を排除するだけであって、イデオロギー的である虚偽の存在を否定せず、逆にそうした虚偽の存在を際立たせる。したがって、(2)「すべてのイデオロギー的なものは虚偽である」という仮説が論駁されずに存続する。(2)については、イデオロギー的であっても虚偽ではないもの、つまり、イデオロギーの主張が真でありながらイデオロギー的であると判断することができるような事例を示せばよい。以上の手続きを行い、領域確定の視点から虚偽説を相対化した。

だが、以上の手続きは、イデオロギーが虚偽である場合がありうることを否定しない。そのため、そうしたイデオロギーに見出される虚偽はイデオロギーに固有な虚偽ではないかという仮説がありうる。R・ゲースの「軽蔑的な意味でのイデオロギー」を参照して、次にこの問題を考察した。軽蔑的な意味でのイデオロギーは、三つに下位分類される（認知的、機能的、発生的）。それぞれの批判的分析を通じて、イデオロギーに固有の虚偽は、実はイデオロギーに頻繁に随伴する虚偽にすぎない可能性があり、この種の虚偽は、それがイデオロギー的な機能を遂行する限りで他の虚偽から相対的に区別されるが、しかし、この機能が特定の虚偽に予め備わっていると言えない（真の信念もこの機能を果たしうる）と結論づけた。

領域の問題としては、必ずしもすべての虚偽がイデオロギー的であるわけではなく、すべてのイデオロギー的なものが虚偽であるわけではない。また、特定の虚偽にあらかじめイデオロギー性が備わっているとは言いがたいのである。

結論（第10章）

結論部では、イデオロギー支配の過剰評価の問題をイデオロギーの問題地盤との関連で考察した。この問題は、イデオロギーの問題地盤自体に内存すると考えられる。そこでは、イデオロギーが政治的な支配関係の媒介として特徴づけられていた。ここで注意すべきは、この特徴づけは最初から支配的イデオロギーの特徴づけだったのではないかということである。つまり、イデオロギーの問題地盤は支配的イデオロギーをモデルとしていたと言い換えることができる。

提出論文は、支配的イデオロギーの身分に関しては、支配的イデオロギーの身分を引き下げるべきとする『支配的イデオロギー・テーゼ』の主張（主としてイデオロギー外的な契機が支配と服従を媒介する、支配的イデオロギーが支配と服従を完全に実現してわけではない）に対して同意の準備があることを示した。さらに、支配的イデオロギー論の改訂の方向も示した。支配的イデオロギーといえども、それが作動するためには、イデオロギーを前にした人間を説

得し、その同意を形成しなければならない。つまり、イデオロギーを前にした人間と交渉しなければならない。イデオロギーの作動には、イデオロギーの説得を解釈し判断するイデオロギーを前にした人間を想定しなければならない。イデオロギーの作動のメカニズムにこうした視点を導入することが、改訂の方向である。

しかし、支配的イデオロギーの身分の引き下げと改訂を承認したとしても、それはイデオロギーの効果をすべて否定することではない。ただし、この効果を考察するためには、従来の支配的イデオロギー論とは別の新たな枠組みを構築する必要がある。この必要性の確認をもって、提出論文は閉じられる。

論文審査結果の要旨

本論文はまず、一般にイデオロギーが問題化される地盤を社会における政治的な支配関係のうちに見定め、多様なイデオロギー観に共通するその公約数的な定式——イデオロギーとは、人間の社会的な支配関係を媒介する、しかもたいていは社会的現実を隠蔽し歪曲するような、観念的な社会現象である——を設定する。こうした定式を暫定的な枠組として、イデオロギーに関する諸概念や諸モデルを検討しつつ、観念や言説がイデオロギーとみなされるさいの条件とその諸契機を確定し、それらの概念やモデルがいかなる契機に立脚するかを確認している。そこから、従来のイデオロギー論が支配性の契機を一元的に過大評価し、個人の受動性を自明視していることを際立たせている。本論では、こうした解明動機を経糸として、マルクスから今日にいたるイデオロギー論の批判的解釈が展開されるのである。その論述展開は四つの主題群に分かたれる。(一) マルクスのイデオロギー論の性格を解明する第二、三、四、五章 (二) マルクシズムに一般的なイデオロギー論の二つのモデルを検討する第六章 (三) アルチュセールのイデオロギー論を考察する第七、八章 (四) イデオロギーの虚偽性の問題を統括する第九章。本論文はこれらに序論と結論をあわせた全十章から構成されている。

(一) 第二章「初期マルクスの宗教批判」は、彼のイデオロギー論の構想がフォイエルバッハの宗教批判を批判的に継承し発展させたものであることを指摘する。神の本質は人間本質の自己疎外的な対象化でありながら人間を対象的に支配するという、転倒の構造を明らかにしたフォイエルバッハから、マルクスはさらに、人間本質の実現を阻害してそうした疎外的表象を生み出させる社会的現実そのものへの批判にむかうのである。第三章「『ドイツ・イデオロギー』のイデオロギー論」では、イデオロギーにおいて人間の諸関係が逆立ちして現象することを説明する camera obscura の比喩を手懸りに、イデオロギーの根本的な構造特質を浮彫りしてい

る。観念論哲学は、現実の生活過程に制約されて産出されたその反映や昇華にすぎない観念的所産を、それ自身が現実を制約する自立的なものであるかのように転倒させている。一般に、イデオロギーは現実に対する関係の観念論的な転倒性と非自立的な反映性の表裏によって特質づけられる。第四章「『資本論』のイデオロギー」は、商品のフェティシズムを範例として商品と宗教的対象とイデオロギーの類比的な現象構造を、したがってイデオロギーのフェティシズム的性格を解明している。労働生産物が私的有用性を越えた自律的な交換価値をそなえる商品となり、資本制社会に流通するように、観念生産物も個人的想念を越えた自律的効力として社会的に通用するものとなる。それは特定のイデオロギーや階級の生産物というよりも、一定の社会体制の構造的効果として生まれる必然化された仮象である。このことは、イデオロギーの存立条件の一契機であるその生産者が一般化、客観化されうることを示している。第五章「マルクスとイデオロギーの終焉」では、以上のイデオロギー規定を統括して、彼のイデオロギー論の構想がイデオロギーの廃棄と現実社会の変革という根本動機を孕んでいることを明示する。疎外的な表象、逆立ちした観念態、フェティッシュ的仮象はいずれも、その起源である人間の現実的本質や産出活動を隠蔽して自立化し、人間を支配し制御するにいたるが、そうした倒錯は社会的現実の倒錯に根ざしているからである。

(二) 第六章「イデオロギーの二つのモデル」は、マルクシズムに大きな影響を与えたモデルをイデオロギー論一般の地平で検討している。『経済学批判』の建築モデルでは、土台である経済が上部構造のイデオロギーを制約する。それは経済に対するイデオロギーの存在披拘束性と反映性を強調し、経済決定論を惹起する可能性を有している。『ドイツ・イデオロギー』の階級モデルでは、階級をその生産主体とするイデオロギーの階級帰属性と支配階級によるイデオロギーの一元的支配力が強調される。論者は両モデルの補完と葛藤の関係を論述し、その間の大きな振幅に注目している。

(三) 第七章「イデオロギーの支配と支配的イデオロギー」は、反経済主義とイデオロギー論の再興を推進したアルチュセールを論じている。彼は社会の複合的・構造的な統一態におけるイデオロギーの相対的自律性を認め、それが経済過程の存立と活動を可能にする条件でもあるとする。さらに、それは社会に不可欠の凝集機能として、歴史社会に普遍的に貫通する本質構造的な機能契機であるとする。イデオロギーの一般的機能への固有の視野を開く洞察であるといえよう。しかし論者は、社会に普遍的なイデオロギーと階級帰属的なイデオロギーの二重性が孕む問題を批判的に論究している。第八章「イデオロギーと想像的なもの」は、アルチュセールのイデオロギー規定の本質契機をなす想像性の特徴を明らかにする。彼によれば、イデオロギーは人間の現実的な存在条件に対する現実的關係ではなく想像的關係を表現する。こうした想像性は現実と一致しない虚偽ではなく、現実との関係を本質的に構成する契機である。

想像性契機のこうした普遍化と本質化は、イデオロギーを生の態勢の原基的な層にまで深化させる。が、それは主観的なものの曖昧さや過剰さをもたらさないだろうか。しかし、想像性は私的主観の領域に属するのではなく、諸個人の社会的な関係と統合を可能にする超個人的、集合的な構造であり、その限り客観的な性格をもつものである。

(四) 現実に対する観念の関係に含まれる転倒性、仮象性、歪曲性などの虚偽性格は諸処で言及されていた。第九章「イデオロギーと虚偽」は総括的に、イデオロギーに固有の虚偽性がどこに存するかを確定している。詳細な吟味を通じて、イデオロギーの虚偽性は認識内容の虚偽や発生起源の制約に必然的に結びつくものではなく、それらに対して中立であること、それは社会的関係のなかで一定の支配性に関与する機能（正当化や隠蔽など）のうちに存することが論証されている。もっとも、そうした機能がイデオロギー的虚偽性として評価され批判されるためには、人間の歴史社会の倫理性に関する洞察——それ自身がまたイデオロギー批判にさらされうる——が前提されなければならないであろう。

以上のように、論者はイデオロギーに関する諸理論や諸概念を検討し、その存立条件をなす諸契機を明示的に規定している。そして、それら諸規定の間の矛盾、緊張、両立、補完などの関係をうむことなく詳察し、自らのイデオロギー観の軸となる契機を浮き上がらせている。それは、支配イデオロギーの一元的な過大視を相対化すること、対抗イデオロギーをも理論的視野に収め、イデオロギーを多元的な動態において捉えること、イデオロギーによる個人の被媒介性だけでなく個人の主体的関与の契機をも顧慮すること、といった点を強調するものである。なお、本論文では主題の方法的な制限によって抑制されているが、イデオロギー問題に関連する多面的な事象領域と学問領域に開かれた生産的な研究を推進すること、また、イデオロギー論としてのマルクス解釈を専門的なマルクス学の知見との参照関係にも耐えうる水準にまで鍛えることなどが、今後に期待される。しかし、マルクス、アルチュセールを中心に今日のイデオロギー研究の諸文献をも渉猟しつつ、主体的な研究姿勢と構想の方法的首尾を貫いた研究は、多とされ囑目されるものであり、その成果は社会哲学ならびに社会思想史の進展に寄与するところ少なくないと評価される。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。